

角の上の蚊

一匹の蚊が大きな牛の角に止まって長い間休んでいましたが、やがて飛び立とうとしたときに牛に言いました。

「おい、牛さん 僕にもっといてもらいたいかね」
「さあ わしは君が止まっていたことも気づかなかつたし、多分君がいなくなっても気にもならないよ。そんな事はわしには全然関係ないことだよ」



ししのじじいの悪知

年老いた獅子がいました。以前のように駆け回ってえさをとることはすでに無理な状態になっていたのです。そこで獅子は考えてほら穴に入り病気のふりをすることになりました。

このようにしてお見舞いにきた動物をつぎつぎに捕まえて餌にしていたのです。ある日、狐がやって来ました。狐はほら穴の入口から少しはなれたところにたちどまって

「獅子さん お見舞いに来ましたよ お加減はいかがですか」

「やあ 狐さん どうも良くないんだよ まあ中に入っておくれ」

「ああ 有り難う けれどここに沢山の動物の足跡があるんだけど穴へ入っていくものばかりだね

ここから出てきた動物はいないという事なんだ じゃあ さようなら」



「王子の現実」

晋の明帝が五、六歳ごろのこと。父の元帝の膝に坐っていると、長安から客人がきた。

「長安とお日様と、どちらが遠いと思うかね」と

父が明帝に聞いた、幼い明帝は直ちに

「お日様です」 「どうしてだ」

「長安からは人が来ますが、お日様から人が来た事は聞いたことはありません。」

父、元帝はその答えに大いに満足した。翌

日、群臣を集めた宴の席で昨日の事を話し、もう一度同じことを明帝に聞いてみた。すると今度は「長安です」と答えた

「どちらが遠いかと聞いているんだよ」「長安です」

「それではどちらが近い?」「お日様です」「どうしてだ?」

「顔をあげると、お日様は見えますが、長安は見えませんか」

